

---

〈論 文〉

## イングランド王ジェームズ1世の議会との抗争、 外交政策、宗教政策ならびに海外植民地

——スコットランドの近代への途(3)——

King James I's Battle with the Parliament, his Foreign Policy,  
Religion Policy and the Oversea Settlement

—— On the Way to Modern Society(3) ——

久保田 義 弘

---

### 要 旨

本稿では、イングランドとスコットランドの同君連合後のイングランドにおけるジェームズ1世の内政および外交政策の遂行で議会との対立・闘争を通じて如何に自身の政策を実行したのかをみる。特に、王家の財政収入の調達と、スペイン戦争の遂行のための資金調達で彼と議会との対立を概観する。また、彼の宗教政策では、エリザベス1世の宗教政策を継承したことを説明する。さらに、彼の枯渇する国庫を救済するための勅許会社の拡張と植民政策の推進を概観する。後者の植民政策の成功例としてのジェームズ・タウンを取り上げる。

本稿の構成は、第1節でジェームズ1世とイングランド議会：王の国庫窮状の打開をめぐる闘い、第2節で、ジェームズ1世の外交政策、第3節で、ジェームズ1世の宗教政策、第4節で、ジェームズ1世の植民政策、ジェームズ1世の即位以前の勅許会社、ジェームズ1世の勅許会社と植民政策について説明する。特に、ヴァージニア会社の設立、植民地ジェームズ・タウンとその窮乏化、そしてジェームズ・タウンの放棄とその救済、そして、植民地の払い下げとその成長について説明する。

(キーワード：封建的特権、寵臣ジョージ・ヴァイラーズ、フランシス・ベーコン、30年戦争、ジョン・ノックス、スコットランド信条、教会の統治、主教派と長老派、王国教会、パースの5箇条、勅許会社、ロシア会社、レヴァント会社、東インド会社、ヴァージニア会社、ジョン・ロルフ、植民地ジェームズ・タウン、クリストファー・ニューポート(Christopher Newport)、ジョン・スミス(John Smith)、植民地の払い下げ、ジョージ・イヤールディレー(George Yeardley)、ポカホンタス(Pocahontas))

## はじめに

本稿では、イングランドとスコットランドの同君連合後のイングランドにおいて、ジェームズ1世が議会との対立・闘争を通じて、如何に彼の内政および外交政策を実行したのかを概観し、特に、王家の財政収入の調達と、スペイン戦争の遂行のための資金調達で彼と議会との対立・闘いを概観する。また、彼の宗教政策では、エリザベス1世の宗教政策を継承したことを説明する。さらに、枯渇する国庫を救済するための国王の勅許会社の拡張と植民政政策の推進を概観する。後者の植民政政策の成功例としてのジェームズ・タウンを取り上げる。

### 第1節 ジェームズ1世とイングランド議会：王の国庫窮状の打開を巡る闘い

ジェームズ1世の国庫はいつも資金不足であった。エリザベス1世には子供もいなかったもので、緊縮財政で国庫を保つことも不可能ではなかった。しかし、ジェームズ1世には王妃、息子、娘がおり、一定程度以上の国庫収入を確保することが必要であった。庶民院では多くの時間をジェームズ1世の国内政策や外交政策の討議に当てた。ジェームズ1世は、イングランド議会に対して国事を国王と枢密院に委ねるように命じ、議会が国王になし得ることを論じるのは臣民の暴動であると考えていた。ジェームズ1世は、議会で国王の権力が論じられることに決して賛成しなかった。議会とジェームズ1世は、利害を異にしたまま議会内での交渉に入った。

彼は、1606年の議会で国庫収入の不足を補うために、国王が議会の協賛を得ることなく、国民に関税を課すことができると提案した。ジェームズ1世の治世以前にも、イングランドでは羊毛、皮革、錫、葡萄酒などの輸出入に関税を課していたが、彼は、多くの財貨の輸出入に関税を課す制度を布告した。従来、そのためには議会の協賛（承認）が必要であった。また、レバント商会<sup>1</sup>が解散したとき、その商会が取り立てていた関税は王権に帰属するとし

---

<sup>1</sup>レバント商会は、1581年にトルコあるいはレバント地域との貿易を支配するために勅許された商会であった。この成立では、1580年にロンドンの数人の商人がトルコとの貿易に関して排他的権限を得るためにエリザベス1世に勅許を求めた。その商人は、植民地を求めるのではなく、貿易センター(Factory)を建て、貿易の中心地を形成することに関心を持っていた。例えば、Aleppo、コンスタンティノープル、アレクサンドリアやSmyrnaなどに商館(Factory)が建てられた。1588年までには、レバント商会は、株式会社(joint stock company)に衣替えしていた。1592年には新たな勅許が与えられ、そして1594年には規制会社になっていた。

1606年にジェームズ1世は、勅許を更新し、それに新しい特権を付加したが、彼は反トルコであったので、トルコとは直接交渉することはなかった。それでもイングランドとトルコの貿易は拡大した。武器貿易によって利益を得ていた。繊維製品の輸出の成長が著しかった。1609年と1619年の間では、反物の輸出では、トルコがその50から75パーセントを占めていた。トルコ貿易では利益が得られた。ジェームズ王は反トルコであったが、トルコとの貿易を拡大し、王の財政収入をこの貿易からの収入に依存されるよう

て差し押さえた。ジェームズ王は、議会の抗議も聞き入れられなかったので、議会はその件を財務府裁判所に持ち込んだが、1606年にその裁判所も関税は外国貿易の結果であり、外国貿易は王権に帰属しその結果である関税も王権に属すると判決した。このときには、イングランド貿易は急速に発達し、イングランドはムガール帝国の香料貿易による収益を獲得しつつあった。その判決は、その収益の増加がジェームズ1世王の収入を増加させることを意味していた。

ジェームズ1世は、若い相続人の後見権、女相続人の結婚権を使って収入の増加を図った。1610年の議会でソールズベリー伯ロバート・セシル (Robert Cecil, 1<sup>st</sup> Earl of Salisbury)<sup>2</sup> (1563年生-1612年没)は、庶民院が王室費を20万ポンド増額することと引き替えに、後見権や結婚権などの特権や徴発権を放棄することを提示した。そして王室費を20万ポンドに引き上げる提案を行った。これは「大契約 (The Great Contract)」として知られている。庶民院がその内容を信用しなかったため、その提案は議会を通過することはなかった。その計画は失敗に終わった。彼は、その収入不足を埋めるために、若い相続人の後見権、女相続人の結婚権などの封建的特権を行使し、かつ爵位の売買を行った。1611年に議会は、ジェームズ1世に対して自由民 (臣民) の財産や財貨に課税する場合には、議会の協賛を必要とすることを請願し、併せて、高等宗務官裁判所<sup>3</sup> (Court of High Commission) などの裁判権が法によって制限されることなど宗教問題も王権の範囲外であることを認めるように請願した。ジェームズ1世は、寵臣ロバート・カー (Robert Carr) (1587年生?-1645年没)の助言を

になった。

<sup>2</sup> 彼は、行政官であり政治家で、ウィリアム・セシル卿 (William Cecil, 1<sup>st</sup> Baron Burghley, Lord Burghley) (1520年生-1598年没)の息子であり、哲学者フランシス・ベーコン (Francis Bacon) (1561年生-1626年没)と従兄弟であった。彼は、ケンブリッジ大学の聖ジョン・コレッジで教育を受けた。1590年にウルシンガムが死ぬと、彼の後を継ぎ国務大臣になった。1589年8月31日に、彼は、エリザベス・ブルーク (Elizabeth Brooke)と結婚し、3人の子をもうけた。1603年に男爵セシルが授けられ、1604年には子爵クランボーンが授けられ、1605年に伯爵ソーズベリーが授けられる。

<sup>3</sup> これは、国教教務委員会 (The Ecclesiastical Commission) とも呼ばれた。高等宗務官裁判所は、16世紀に宗教改革の法律を強制し、かつ、教会を統制するために国王によって指揮されたイングランドの教会裁判所であった。国教会の権威を認めない人々に利用された。1534年の首長令 (Act of Supremacy) は、国王ヘンリー8世を国教会の長と認め、さらに聖職者の視察・教育・監視・改宗等の権限を国王に与えた。1549年のエドワード6世の治世下で最初の委員会 (Commission) が開催された。このときの委員数は24名であった。

初めこの裁判所は一時的会議で殆ど権限がなかったが、エリザベス1世の1570年以降には常設機関になり、「国王至上権確定法」や「祈祷方式統一法」に反する一切の意見や行為がこの裁判所の管轄下に入った。それには、聖職を握り、聖職者を管理し、また大学や学校の規則を変更し修正する力があつた。その裁判の範囲は、異端、分派、国教忌避、近親相姦、加重姦通罪などを含んでいた。また思いのままに罰金を科すことができ、投獄もできた。裁判は宣誓方式でなされた。宣誓を拒否した人は、星室裁判所 (Court of Star Chamber) に回された。この委員会 (Commission) には、多数の文官 (laymen) も含まれていたが、実権は大主教によって握られていた。この裁判所は1641年に廃止された。

受けて、1611年に議会を解散した。それから1621年までの間に1614年に唯1回議会<sup>4</sup>を召集したにすぎない。1614年の会議におけるジェームズ1世の予算政策は、強制的公債、新関税、官職売却で収入増を図った。

また、1614年に議会を解散すると、1621年まで議会を全く再開しなかった。その間、ジェームズ1世は、議会を無視しただけではなく、1612年にソールベリー伯ロバート・セシルが死ぬと、ジェームズ1世は自身の大臣で統治する考えを持ち、ソールズベリー伯が行っていた執務をロバート・カー (Robert Carr, 1<sup>st</sup> Earl of Somerset) (1587年生?-1645年没)に行わせた。彼は、ジェームズ国王の寵愛<sup>5</sup>を受け、1613年11月にはサマーセット伯を授けられ、12月にはスコットランドの会計局長官、1614年には宮内長官を授けられた。しかし、ロバート・カーのアドバイザーであり、かつ、その立役者であったトマス・オヴァベリー (Thomas Overbury) (1581年生-1613年没)を毒殺<sup>6</sup>したことが国王に知られ、彼と彼の妻がその嫌疑を懸けられ、その寵愛を失い、失脚した。1615年からジェームズ1世の寵愛者は、バッキンガム公ジョージ・ヴィラーズ (George Villers, Duke of Buckingham) (1592年生-1628年没)に代わった。彼の統治資格は、虚栄心と国王に対する彼の個人的な魅力によって保たれていたにすぎないが、彼には政府高官の任命権が王より託されていた。ジェームズ1世は、枢密院の全ての権限を奪う横暴な行動を取った。このことは、彼の王権神授説<sup>7</sup>を裏付けている。王自身が国事を統制する首相になり、枢密院から国事を牽制する権限を取り上げて、気

---

<sup>4</sup> この議会選挙では、多くの新人議員が当選した。300人の新人議員が誕生し、その中には、ジョン・エリオット (John Eliot) (1592年生-1632年没)やトマス・ウェントワース (Thomas Wentworth) (1593年没-1641年没)などがいた。

<sup>5</sup> 彼が何故国王ジェームズ1世の寵愛を受けたのであろうか。彼は、高水準の知性ではなかったが、容姿端麗で、卓越した気だてで、かつ、たしなみのある人物であった。男色の国王は、直ぐに、彼を寵愛した。

<sup>6</sup> 彼の毒殺には、政界を牛耳っていたハワード家 (The Howards) が関与していた。ロバート・カーは、サフォーク伯の娘フランシス・ハワード (Frances Howard) (1590年生-1632年没)と結婚することを計画していた。彼女が既に結婚していた3代エセック伯ロバート・ディヴェロー (Robert Devereux, 3<sup>rd</sup> Earl of Essex) (1591年生-1646年没)と離婚することをジェームズ王によって支持され、1613年9月に3代エセック伯との結婚が無効であるという布告を得て、その12月に彼女は、ロバート・カーと結婚した。この結婚を思いとどませようとしたのがトマス・オヴァベリーであった。ハワード家は、邪魔になった彼を宮廷から追い払おうとした。1613年4月に彼をロンドン塔に閉じこめ、その5ヵ月後の9月に彼は死亡した。フランシス・ハワードとロバート・カーは、オヴァベリー毒殺の嫌疑が懸けられ、裁判にかけられた。彼らはジェームズ1世によって罪を認めるように強制され、両者は罪を認めたが、しかし、判決は実行されなかった。フランシスは、1622年までロンドン塔に監禁され、ロバート・カーは一貫して無罪であることを主張し続けたために、1624年までそこに閉じこめられた。

<sup>7</sup> イングランドのチューダ朝では、外国の干渉も教皇の干渉も一切受けない君主が絶対君主であったが、ジェームズ1世は、この言葉を王は法の制限を受けないこと、自分自身の意志以外のものには全く責任を負わないという意味に解した。これが、ジェームズ1世の王権神授説の原理であった。これに従って、ジェームズ1世は、国事を王と枢密院に委ねるように命じ、1611年の議会では、王のなし得ることを議論することは臣民の暴動であり、国王の権力が議論されることに決して賛成しないと述べた。

に入りの無能な寵臣ヴィラーズに国事を任せた<sup>8</sup>。

## 第2節 ジェイムズ1世の外交政策

ジェイムズ1世の対外政策に目を向けてみよう。対スペイン対策にジェイムズの外交姿勢が表れている。1618年にカトリック教のハプスブルグ家の支配するボヘミアに反乱がおり、ドイツの平和を維持してきていた宗教上の休戦が破れた。ジェイムズ1世は、スペインを抑圧するのではなく、それと友好関係を保つ政策を採ろうとした。彼は、ドイツ諸公がボヘミアを支持したとき、それに支援することを拒否しただけではなく、ファルツ選帝侯を支持してきたオランダに戦いを仕掛けると脅した。ファルツ選帝侯フリードリヒ5世(Friedrich V) (在位1610年-1623年)にボヘミアから身を引くように迫った。ジェイムズ1世は、平和を回復するために、イングランドとスペインとが共同することを狙っていたが、フリードリヒは同意せず、またスペインもまた皇帝援助に乗り出した。ボヘミアの局地戦がヨーロッパ戦争、すなわち30年戦争<sup>9</sup>に突入した。これによってジェイムズの政略は失敗に終わった。イングランドもこの戦争に巻き込まれ、ジェイムズ1世は、ファルツ支援のために兵をおくるためと戦費調達のために議会を召集しなければならなかった。1621年に議会が召集された。この議会で国王は50万ポンドの王室費を求めたが、議会は15万ポンドを認めただけであった。庶民院は、スペインとの戦争を要求し、フランシス・ベーコン(Francis Bacon)<sup>10</sup>(1561

<sup>8</sup> ジェイムズ1世は、寵臣ジョージ・ヴィラーズをバッキンガム公にし、彼に政府の高官を任命する権限を与えた。彼に賄賂を贈るか、彼の貪欲な親戚と縁組みすることが政界で立身する唯一の道になった。彼は、才能は爪の垢ほども無かったが、若く美形からくる自信と大胆さを持っていた。ジェイムズ1世は、ヴィラーズの首にもたれることを好み、またその頬に音を立てて接吻した。

<sup>9</sup> 30年戦争は、初め、プロテスタントとカトリックの宗教闘争であったが、第2段階以降では国家間の闘争の様相を呈した。ヨーロッパにおいて、覇権を握ろうとするハプスブルグ家と、それを阻止しようとするイングランド、デンマークやスウェーデンなどのヨーロッパ諸国との国際戦争に発展した。ボヘミアとファルツ選帝侯がハプスブルグ家に反対して反乱をおこしたが、ハプスブルグ家に弾圧され、ドイツ全土に亘って強力なカトリック政策が採られた。その後、イングランドやデンマークやスウェーデンなどの新興国が反ハプスブルグ家の旗印の下にドイツに侵入した。その後、カトリックのフランスが反ハプスブルグ家の立場を採り、ドイツに侵入した。フランスは、ブルボン朝の確立を目指していた。

この戦争は、4段階に分けて説明される。第1段階は、ボヘミア・ファルツ戦争(1618年-1623年)、第2段階は、デンマーク・ニーダザクセン戦争(1625年-1629年)、第3段階は、スウェーデン戦争(1630年-1635年)、第4段階は、フランス・スウェーデン戦争(1635年-1648年)の4段階でその進攻が説明される。1648年のウエストファリア条約の講和条約によって、その終結をみた。

<sup>10</sup> 彼は貴族出身、彼の父(ニコラス・ベーコン, Nicholas Bacon)(1509年生-1579年没)は国璽尚書(首相)、伯父は国務卿(1558年-1572年)ならびに大蔵卿(1572年-1598年)に就いたウィリアム・セシル(William Cecil, Duke of Burghley)(1520年生-1598年没)であった。彼自身は、1613年に検事総長、1617年に国璽尚書、シェイクスピアが死んだときに枢密院に招かれ、1618年に大法官に上り詰めている。しかし、1621年の議会では、庶民院によって汚職のために弾劾された。彼の政治生命は終わった。ベーコンは、まだ訴訟が片づいていない人々から贈与を受け取っていた。彼は、国璽を取り上げられ、官職失格と議員失格を

年生-1626年没)を取賄のかどで弾劾することをもとめた。その次の議会では、ジェームズは90万ポンドを求めたが、議会は7万ポンドを議決し、庶民院は、チャールズ皇太子のスペインの王妃との婚姻を公然と攻撃した。1622年に議会は解散された。1624年に新議会が開催された。庶民院も熱狂的にスペインとの戦争を支持し、30万ポンドを議決した。

ジェームズ1世は、その王権を巡って議会(庶民院)と権力闘争を繰り返した。市民層が成長し、王権は抑圧される傾向にあったが、ジェームズ1世は自身の王権神授説を盲信し、自身の寵愛者によって議会および枢密院ならびに法を無視して統治に奔走した。

### 第3節 ジェームズ1世と宗教政策

#### 3.1 ジェームズ1世と長老派

ジェームズ1世は、両国の議会の連合だけではなく、宗教による両国の連合を図ることを目指していた。ジェームズ1世が即位すると、国内の聖職者の10パーセントに当たる800人から千人願(ミレナリ・ペティション)が提出された。この願いでは、祭帽、広い袖の付いた聖職者の白い外衣であったサープリス(surplice)、結婚指輪、教会音楽、裁判所の改革、祈祷書から迷信的慣用を除くこと、経外聖典からの日課(朝夕に読む聖書の一節で、祈祷書に書かれていた)を廃止すること、安息日をもっと厳格に守ること、説教師の叙任と訓練などが話されることになっていた。ピューリタンからは、白い法衣の着用、洗礼時の十字のしるしの使用などの一定の礼拝様式上の些事を受け入れるか断るかの自由、説教をすることや安息日を守ることや聖徒記念日を守らないことなどが請願として提出されていた。これに返答するために、ジェームズ1世は、1604年1月12日から18日に、ハンプトン・コート宮殿に主教、ピューリタンの聖職者などの宗教界の代表を集め会議を開催した(ハンプトン・コートの会議)。その席上でジェームズ1世は、国教会の立場を採ること共に、ピューリタンやカトリックの極端な宗教上の立場は排除することを宣言した。

カルヴァンの教義を継承しスコットランドで力を持っていた長老派は、公衆道徳の監督権を持っていた。長老達は、信徒を統べ、彼ら自身の団体を整え、信仰の諸問題を決定し、教

---

宣告された。その後、セント・オルバーンに引きこもって執筆と思索の生活に入った。

彼の著作には、『随筆集(Essayes)』(1597年)、『学問の発達(Of the Proficiency and Advancement of Learning)』(1605年)、『新機関(Novum Organum)』(1620年)、『ニュー・アトランティス(New Atlantis)』(1626年)などがある。彼は、『学問の発達』において、ジェームズ1世の王権神授説を「国王の義務に関するすぐれた本であります。その著作は、神学、道徳学、政治学から豊かに成り立っており、他のあらゆる技術について非常に多くまじえてあります。最も健全で健康な著作の1つであります。」と讃辞を述べている。パーコンは、ジェームズ1世の議会無視の政治手法をどのように評価していたのであろうか。『ニュー・アトランティス』では、プラトンやトマス・モアのユートピア国家論の流れに沿ったユートピアを展開しているが、彼は、家父長制を支持しているので、ジェームズ1世の王権神授説を受け入れていたのではないかと思われる。

会法規を執行していた。他方、世俗の支配者は長老達の決定したことを執行し、長老達の法令が実施される。カルヴァン教義を担う長老達は、寛容を全て排撃している。長老派は、主教制も分離派の立場を否定した。牧師の支配が教会政治の唯一の合法的形態として確立された。長老組織がスコットランド教会の統治方式で、これは1592年に確立した。教会の統治は、全国総会 (General Assembly) の手の中に置かれ、その下に地方大会 (Synod)、一地方の全教会の牧師と長老からなる評議会であった中会 (ピレスビテリアン)、そして牧師と長老から構成される最下位の会議であった教会会議から構成されていた。教会牧師は、精神界の権威と管轄権のすべて、すなわち、教義の制定、儀式の次第、公衆道徳の監督などをその手の中に持っていた。

長老制度の教会に王権を脅す要素があったので、スコットランドの宗教改革やスコットランドの国教統一の問題はジェイムズ1世の手に負える問題ではなかった。スコットランドの宗教改革は、4段階で説明される。第1段階では、ジョン・ノックス以前にルター主義が取り入れられた。初代アラン伯ジェイムズ・ハミルトン (James Hamilton, 1<sup>st</sup> Earl of Arran) (1475年生?-1529年没) のもとで宗教改革が開始された。イングランド王ヘンリー8世がスコットランド王国の併合を狙うことが露見し挫折した。第2段階では、親仏政策に反発するプロテスタント貴族の蜂起であった。イエス・キリストへの信仰を告白する連合が設立された。イングランドの援助を得て、1560年にエディンバラ条約を結び、宗教改革会議が始動した。ジョン・ノックス起草の「スコットランド信条 (Scottish Confession)」を承認し、ローマ教皇司法権の否認、異端禁止法などのカトリック諸法の廃止、ミサの禁止を決めた。第3段階では、1567年頃、教会と牧師の協働関係が回復し、メアリーを廃止する。1560年の諸立法を再確認する。スコットランド改革教会が社会的に確立されたが、内部的には主教派と長老派の葛藤が続いた。第4段階では、1572年のリース協定により、総会に服すると言う条件付で大主教主義の名前を復活させる妥協案が政府と教会で成立した。1584年に国王教会支配権が認められた。国法 (Black Act) が成立し、主教派が権力を握る。1592年に長老教会のマグナ・カルタ (Golden Act) で長老派の自主性を容認する法律を制定するが、1610年にジェイムズ1世の圧力で再び主教派が勝利する。内戦時には長老派が中心であったが、王政復古により、主教派が復活した。1688年の無血革命によって長老派の支配が確立した。

ジェイムズ1世は、主教制度を拒否していた長老制教会 (改革派教会) に対し、司教国會議員を任命して対抗した。彼自身カルヴィニストであったので、彼は宗教上の理由からピューリタンを避けたのではなく、政治的理由からそうしたのである。カトリックへの弾圧を恐れたガイ・フォークス (Guy Fawkes) (1570年生-1606年没) を実行首謀者とする火薬陰謀未遂事件が起こる。この事件に関わった人々は、射殺されるか、首を吊られ、去勢され、内蔵を抜き出された。イエズス会の支部長ガーネット (Henry Garnet) (1555年生-1606年没)

は、この未遂事件について知っていたが止めることもしなかったので、審問にかけられ、処刑された。ピューリタンは、ジェームズ1世の治世下では目立った抵抗運動にでなかったが、チャールズ1世の時代になってその活動は加速された。彼のスコットランドにおける体験から、スコットランドの長老会制度では神と君主（国王）が折り合わなく、彼の王権に馴染まないと確信していた。国家に従属する教会を求めていたジェームズ1世は、君主制と馴染む教会組織として主教制度の教会（国教会）の立場を採ったと考えられる。ジェームズ1世は、主教制を取り入れて、教会を厳正にするための服従に従わない教会牧師300人を離職させた。

長老派の勢いが勝っていたために、ジェームズ1世は、教会の長が国王であることに徹底的に反対していたアンドリュー・メルヴィル<sup>11</sup> (Andrew Melville) (1545年生-1622年没) を1606年にロンドンに呼び出し、スコットランドから追放した。1618年に、パースに聖職者会議を召集し、「パース5か条」で司教（主教）制を強化した。この中には、長老派が最も反対していた聖餐のパンとブドウ酒を受けることも含まれていた。ジェームズ1世が残した宗教に関する問題に「スコットランド国教の統一」の問題があった。

### 3.2 ジェームズ6世とエリザベス1世の教会政策

イングランドの長老制度は、エリザベス1世の治世下で成長した。エリザベス1世の教会政策は、「国王至上権確定法 (Act of Supremacy) と「祈祷方式統一法 (Act of Uniformity) であった。前者では、教会の裁判権と立法権とを国家の手に中に納め、後者では教義や教会法規の方針を規定し、それからのいかなる変更も許さなかった。これによって、一定の宗教改革の原則は承認したが、しかし、過剰な改革派の熱狂は食い止めた。説教師許可制によって、説教壇同士の戦いは抑制された。国教帰依の表明と公禱に列席することが、全ての人に要求された。

最初は最高権を代表する一時的な会議であったが、後には無限の王権を振う常設機関に育った国教会教務委員会 (The Ecclesiastical Commission)<sup>12</sup> に新しい諸権力が授けられたため

---

<sup>11</sup> アンドリュー・メルヴィルは、1574年に留学先のフランスあるいはジュネーブからスコットランドに帰国し、1580年にセントアドリュース大学の学長になった。1582年に長老派教会の大会の議長を務め、カトリック的な監督制度をスコットランド教会に持ち込むことに反対し、教会に長老制を確立することに努力した。彼は、政府によるあらゆる干渉から教会の自由を守るために闘った。彼は、ジェームズ王を「神の愚かな僕」と呼び、「教会はイエス・キリストの王国であり、その国王は神であり、ジェームズ6世はそのメンバー」と主張した。それに対し、ジェームズ6世は、王は教会の単なるメンバーではなく、教会と国家の長であるとし、ブラック・アクトによって、国王が最高権威者であることを規定し、司教制度を謳った。

<sup>12</sup> この委員会は44人で構成された。大主教（大司教）は、カンタベリー大主教（大司教）であった。ホイットギフト、バンクロフト、アボット、ロードなどの大主教（大司教）がいた。アボット委員会の実権を大主教が握った。個人の家での説教と朗読は、全て禁止された。王権が断固たる政策と弾圧手段を採用することを示した。

に、宗教上の休戦は一種の精神的専制に変わった。この委員会は、「国王至上権確定法 (Act of Supremacy)」と「祈祷方式統一法 (Act of Uniformity)」に反する意見や行為がこの管轄下に入り、聖職録を奪うことができた。この委員会は、聖職者をその思いのままに扱うことができた。この他に、この委員会は、大学や諸学校の学則を変更・修正することができた。異端、分派、国教回避のみならず、近親相姦や加重姦通罪もとり扱った。この裁判所の設置は、宗教改革の仕事の半分を破壊した。

#### 第4節 ジェームズ1世下での海外植民とその植民政策<sup>13</sup>

##### 4.1 ジェームズ1世の即位以前の勅許会社

1. 「新天地への商人冒険会社 (Company of Merchant Adventures to New Lands)」は、1551年にリチャード・キャンセラー (Richard Chancellor) (1556年没)、シーボーン・ガ

<sup>13</sup> イングランドの北米植民政策は、エリザベス1世の時代に始められた。ウォルター・ローリー卿 (Sir Walter Raleigh) (1554年生-1618年没?) は、1584年に、現在の北カロライナに2人の偵察隊員を送った。その偵察隊員は、その地がヴァンジナ (Wingina) と呼ばれる王によって支配されていること、および、その地がヴァンガダコア (Wingadacoa) と呼ばれていることを伝えた。これに因んでローリーとエリザベス1世は、その地をヴァージニアと命名した。1585年に、ローリー探検艦は、Tigerなど4隻の船団で構成されていた。その船団の提督は、リチャード・グレンビル卿 (Sir Richard Grenville) (1542年生-1591年没) であった。彼は、ラルフ・レーン卿 (Sir Ralph Lane) (1532年生?-1603年没) と一緒にプリマスを出港した。航海は、強風のために、グレンビル卿の艦船 Tiger は、他の船からはぐれ、困難を極めたが、どうにか北カロライナ海岸のロアノーク島 (Roanoke Island) にロアノーク植民地を建設した。植民地を建設すると、直ぐに、グレンビル卿は、1586年4月に戻る約束をし、ロンドンに引き返した。植民者と土着のアメリカ人との接触が起こると、植民者達は彼らに厳しく対応した。村の土着民は、銀製のカップを盗んだとして非難された。これによって植民者は彼らの要塞に攻撃を仕掛けるようになった。1586年4月に、彼らは、物資不足と土着員との衝突を避けるために、フランシス・ドレーク卿 (Sir Francis Drake) (1540年生?-1596年没) の艦隊でポーツマスに引き返した。その最初の総督は、ラルフ・レーン卿であった。

ウォルター・ローリー卿は、1587年にその植民地を恒常化するために、第2次の植民者をそこに送った。その植民地の総督は、ジョン・ホワイト (John White) (1540年生?-1593年没?) であった。彼は、最初の探検時には、指揮官リチャード・グレンビル卿の航海を記録する芸術家として随伴していた。1586年に一旦イングランドに戻り、1587年に113名の植民者を募り、その5月にライオン船 (The Lion) でヴァージニアに向けて再出港した。その中には、彼の娘 Eleanor と娘婿の Ananias Dare (1560年生?-1587年没) もその一員に含まれていた。彼らは、ヴァージニアのチェサピーク湾に向かう予定であったが、ポルトガルの船長は、突然、計画を変更し、彼らをロアノークで下船させた。ここでの2回目の植民では、1585年に残しておいた構築物の修理から始めた。前回の探検で残された人は、見あたらなかった。多分、彼らは、Secotan, Aquascogoc や Dasamongueponke によって殺害されたのであろうと思われる。彼は、不足物資を補給するためにイングランドに戻ることを余儀なくされた。しかし、彼は、イングランドとスペインの無敵艦隊との戦いのため、イングランドから出ることができなかった。彼は、1590年3月になって漸くロアノークに向けて出港した。1590年8月にそこについたが、居残っていた植民者は誰一人として居なかった。ロアノーク植民地は、「失われた植民地」となった。彼らの消息は、全く、不明のままである。彼は、1590年10月にプリマスに戻った。

ボット (Sebastian Cabot)<sup>14</sup> (1474 年生? -1557 年没), ヒュー・ウィロウビー卿 (Sir Hugh Willoughby) (1554 年没) などの 240 人の冒険家が 25 ポンドで株式を購入し, 設立された。この会社の目的の第 1 は, 中国 (Cathay) やマラッカ諸島 (香辛料諸島) への北東航路 (Northern Passage) を見つけること, その第 2 は, イングランドの毛織物衣服 (woolen cloth) の輸出先を見つけてることであった。1553 年に国王エドワード 6 世 (在位 1547 年-1553 年) から勅許を受け取り, シーボーン・ガボットを総督に任命した。その最初の冒険は, 中国への北東航路を見つけるために, ヒュー・ウィロウビー卿は, 艦長として指揮したが, 航海の経験がなかったので, リチャード・キャンセラーを航海士として伴った。1553 年 5 月 10 日に 3 艘の小さな船団でロンドンを出港した。ウィロウビー卿は, *Bona Confidentia* (90 トン) と *Edward Bonaventure* (60 トン) を指揮したキャンセラーと共に 120 トンの *Bona Esperanza* に乗船した。この船団は, 北海で嵐のためにバラバラになった。

ウィロウビー卿は, *Bona Esperanza* と *Bona Confidentia* を従えて, バレンツ海 (Barents Sea) を横切り, ノール岬を回り, 東に進みノヴァヤ・ゼムリヤ (Novaya Zemlya) に到達したが, そこから南下し, Varzria 川の河口<sup>15</sup> に至った。そこで, 船が流水に入り込み, 身動きができなくなり, ウィロウビーと彼の乗組員は, ラップランド (Lapland) の海岸で越冬しようとしたが, 寒さのための備えをしていなかったために, 凍死した。

キャンセラーの *Edward Bonaventure* は, ノール岬 (North Cape) を周り, 1553 年 8

---

<sup>14</sup> 彼は, ヴェネチアで生まれ, 1484 年頃にプリストルに移住したと思われる。彼は, 冒険家として, 2 艘の船で, 1504 年にプリストルから新大陸に航海している。1508 年から 1509 年に, 彼は, インドや中国に至る北西航路 (North-West passage) を発見するための最初の冒険を指揮し, 彼の父ジョン・ガボット (John Cabot) (1450 年生? -1499 年没?) によって築かれた足場を引き継いだ。1512 年には, フランスと戦争をしたヘンリー 8 世 (在位 1509 年-1547 年) の地図作製者として従軍した。この年, スペイン王 (アラゴン王国の王) フェルディナント 5 世 (Ferdinand V) (在位 1452 年-1516 年) は, 彼を, 王の顧問官のニューファンランド海岸についての助言者に任命した。1516 年にはヘンリー 8 世のために, ブラジル海岸や西インド諸島の探検をおこなうために 2 艘の船で出港した。しかし, 大砲の火災が起こったために, 途中で探検をとりやめ, イングランドに引き返した。その後, スペインの王カール 1 世 (Carlos I) (在位 1516 年-1556 年) は, 彼を航海士長官として雇った。彼は, 中国への北西航路の発見の冒険をおこなった。

1525 年に彼はスペインの海兵大佐に任命され, 1526 年 4 月にスペインの Sanlucar de Barrameda (サンルカル・デ・バラメダス) から 200 人の乗った 4 艘の船で出港した。彼は, 中国への航路ではなく, ブラジルに上陸した。彼は, Rio de la Plata の中を探検し, その河口を 5 か月間探検した。ウルグアイ川と Rio San Salvador 川の合流点に居住地を築いた。これは, ウルグアイでの最初のスペインの居住地であった。また, パラナ (Parana) 川と Rio Carcarana 川の合流点にも居住地を設けた。これは, アルゼンチンでの最初のスペインの居住地であった。1529 年に, 彼は, スペインに戻ることを決めた。ブラジルの海岸線に航行し, 1530 年 7 月にスペインのセヴィリアに到着した。

その後, 彼は, 国王から, および, インディオの議会から非難され, 北アフリカの Oran に追放された。1547 年までスペインの航海士長官であったが, 1550 年頃にスペインからイングランドに戻ったと推察される。

<sup>15</sup> 現在のムルマンスク (Murmansk) の東にある。

月にコラ半島 (Kola Peninsula) に沿って白海 (White Sea) に入った。北ドヴィナ川の河口近く (Nikolo-Korelsk Monastery) で碇を降ろし、現在のアゲハリスク (Arkhangelsk) で越冬した。そして、キャンセラーは、ロシア皇帝イワン4世 (Ivan the Terrible) (在位1547年-1584年) に招待され、陸路で1000 kmの旅をし、モスクワに達した。1554年3月にイングランドに戻り、この皇帝からの手紙をイングランド王エドワード6世に届けた。ロシアは、イングランドとの交易を歓迎した。この頃、ロシアは、バルティック海にいたる安全なルートを確認していなかったし、スウェーデン帝国やポーランドーリトアニア共和国 (Polish-Lithuanian Commonwealth) と争っていた。また、西および中央ヨーロッパとロシアの貿易は、ハンザ同盟 (Hanseatic League) が独占していた。イングランドからは羊毛織物を輸出し、ロシアからは毛皮を輸入し、両国の貿易がおこなわれた。1555年には、この会社は、Muscovy 会社 (ロシア会社とも呼ばれた) と名前を変えた。

2. 「ロシア会社 (Muscovy Company)」 (1555年設立) は、ロシアとイングランドを結びつける戦略的な存在となった。キャンセラーが初代の総督であったが、1556年にロシアからイングランドにロシア大使を連れて戻るとき、その船がロシア海岸で難破し、彼は溺死した。アンソニー・ジェンキンソン (Anthony Jenkinson)<sup>16</sup> (1529年生-1610あるいは1611年没) が彼の後を継いだ。ジェンキンソンは、モスクワから陸路で中国 (Cathay) に到達す

<sup>16</sup> 彼は、レスター州の Market Harborough 出身であった。彼は、現代のロシアを探検した最初のイングランド人の一人であった。彼は、ロシア会社のための旅行家であり、探検家であった。彼のロシア探検については、1558, 1561, 1566, そして、1571年の4回知られている。その探検を通して、彼は、イングランドのロシア会社とイワン皇帝との間に交易条項を締結させ、その関係を強化させた。1558年の彼の第1回のロシア探検では、彼は、ヴォルガ川とオカ川を南下し、タタール共和国のカザン (Kazan) を通り、カスピ海を望むアストラハニ (Astrakhan) に至った。彼らは、さらに旅行を続け、カスピ海を渡り、イラクの Serakhs (サラクス) に辿り着いた。ここは、シルクロードの休憩地であった。彼らは、隊商と共に、タタール地方を探索し、そしてウズベキスタンのブハラ (Bukhara) に着いた。ここはシルクロードに位置していたので、彼らは、中国及びインドへの途を辿ることもできたが、その地域の部族や山賊の抵抗に遭ったため、彼らはカスピ海を渡り、1559年にモスクワに戻った。そして1560年に海が開けた後に、彼は、イングランドに戻った。

第2回目のロシア探検では、彼は、イワン皇帝と交易条約を相談するために、1561年8月にモスクワに着いた。そこから、カスピ海に南下し、ペルシャに入った。彼は、ロシア会社のために最恵貿易を達成しようとした。ペルシャ湾のホルムズ (Ormuz) に前哨基地を置いたポルトガルによって、インドとの貿易を阻害され、ロシア会社の貿易品は、シリアを通して中東に来ていたヴェネチア商人との競争に遭遇したが、彼の中央アジアおよびペルシャの旅によって、ジェンキンソンは、ロシア会社のロシアとの交易権を拡張させた。

第3回の探検の折に約束された交易条件をイワン皇帝が反故にしたために、ジェンキンソンは、1571年に、彼は、イワン皇帝との間での交易条約を強化するために、第4回目のロシア探検に遭われた。1572年7月に、彼は、イワン皇帝と最恵取引の約束を取り付けた。ジェンキンソンは、キャンセラーのモスクワまでのロシア探検を、中央アジアのタタール地方まで拡張し、ロシア会社のロシア貿易に関する利権を拡張させた。

るために、ならびに、1562年から1579年の間にはロシアとペルシアの陸路交易ルートを開くために、モスクワを越えて、さらに、東方に旅行をし、中央アジアまで探検・冒険に乗り出した。1577年に、エリザベス1世によって、捕鯨に関する勅許をMuscovy会社は与えられた。この会社の捕鯨地域は、17世紀初期では、スピッツベルゲン (Spitsbergen) 島の辺りに集中していた<sup>17</sup>。

その後、1646年にロシアはイングランドを排除したが、この会社が規制会社に再組織された1660年に、チャールズ2世 (Charlers II) (在位1660年-1685年) が復位し、両国の交易が再開された。1698年にその会社はイングランドーロシア間の交易独占を失った。

3. 「東国会社 (北海会社)」 (Eastland Company あるいは North Sea Company)<sup>18</sup> (1579年設立) は、スカンディナヴィアおよびバルティック諸国との交易を強化し、西ヨーロッパおよび中央ヨーロッパ交易を独占していたハンザ同盟に挑戦する会社であった。この会社の条項<sup>19</sup> は、

- (1)他の会社の構成員であるものは認められず、また、小売業者も会員に認められなかった。
- (2)品位の高い商人は、6ポンド13シリング6ペンスを支払うことなしに、会員として認められた。
- (3)他の会社の特権を放棄し、東国会社の特権を獲得しようとする者は、無料で会員として認められた。
- (4)勅許に示された東国の国々と交易を行っていない商人冒険家は<sup>20</sup>、40マルクを支払って会社の構成員になった。
- (5)会員は、織物衣服ではなく、無料で認められる100単位を除いて染色織物およびプレス織物を輸出すべきである。

この条項は、1661年にチャールズ2世によって確定された。

4. 「レヴァント会社 (トルコ会社)」 (1581年設立) は、トルコやレヴァン地域の国々との貿易を規制するために勅許された会社であった。ロンドンの商人は、1580年にエリザベス1世にレヴァント地域で交易する際の特権を認める勅許を請願した。この会社は、植民地ではなく、貿易センターを置くことを強く求めた。中東のすべての会社の中心となったAleppo, コンスタンティノープル, アレクサンドリア, Symyrnaなどにそのセンターを置いた。1588

---

<sup>17</sup> 1613年の勅許では、スピッツベルゲン (Spitsbergen) 島での捕鯨の独占が与えられた。

<sup>18</sup> この会社の商人は、ノルウェー、スウェーデン、ポーランド、リヴォニア (現在のエストニアやリトアニアなど)、プロシア、ポメラニアなどと交易していた。多くはヨークを中心に活躍した商人であった。例えば、トマス・ハーバート (Thomas Herbert)、チャールズ・ミクルスワット (Charles Micklethwaite)、クリストファー・トッザム (Christopher Topham) などである。

<sup>19</sup> この条項は、1661年にチャールズ2世によって確定された。

<sup>20</sup> 東国会社と商人冒険会社の融合では、それぞれの特権は保持した。

年にレヴァント会社は、規制会社(独占会社)<sup>21</sup>にされ、1595年には、規制会社としての性格が鮮明になった。国王ジェームズ1世は、1606年に会社に新たな勅許を出し、確定した。しかし、ジェームズ1世は、反トルコの宗教上の聖戦に携わって、トルコとの関係を無視したが、トルコとの貿易が拡大した。オスマン帝国が近代化するにつれて、武器貿易では利益を出したが、繊維製品の輸出が拡大し<sup>22</sup>、貿易からの利益の収入に王の財政収入は依存した。チャールズ2世の勅許によって、この会社は、法律を作ることのできる政治的実体になった。構成員の数には制限がなかったが、平均で300であった。必要とされた主な特性は、卸売り商人であることであった。25歳以下は25ポンドを支払い、それ以上の年齢者はその2倍の支払をした。自身の勘定以外ではレヴァント地域に商品を輸出しないこと、また、その会社のメンバー以外の誰にも商品を任せないことを入会時に誓った。

この会社は、ロンドンに総督、副総督、および12人の執行者から構成される評議会を置いた。彼らは、港および全ての都市に会社の構成員である代理者を置いた。その評議会は、船を出港させ、輸出されるヨーロッパ商品価格に課される関税を規制し、輸入品の品質を規制し、税金と会社の共通費用を支払うために商品に課税し、そして国王が港に常駐させる領事官を提供した。それは、コンスタンティノープルおよび Smyrna に2人の領事を選出した。

この会社の輸出品は、その質および範囲で限られていて、貿易赤字であった。その輸出品には、伝統的な衣料、特に子供服とカーシー織り、ブリキ、鉛、香料、黒ウサギの毛皮、アメリカ銀などがあった。その輸入品には、シルクの原料、原綿、紡績糸、干しぶどう、ダマスカス・レーズン、ナツメグ、香料、インディゴ、ゴール、ラクダ織り、羊毛と綿の衣服、maroquin、ソーダ灰、医薬品などであった。

5. 東インド会社 (East India Company)<sup>23</sup>は、1600年に設立された<sup>24</sup>。この会社は、設立

<sup>21</sup> その仕掛け人は、エドワード・オズボーン (Sir Edward Osborne) (1530年?-1591年)と Richard Staper であった。

<sup>22</sup> 1609年と1619年の間で、トルコへの衣料の輸出は、全衣料輸出の50%から805に達した。

<sup>23</sup> この会社は、総督と24人の執行者から構成され、その執行者は役員会 (Court of Directors) を設立した。彼らは事業主の会から任命された。

<sup>24</sup> 1588年にスペインの無敵艦隊を打ち破った後に、ロンドンの商人達は、エリザベス1世にインド洋に出港する許可を願い出た。ジェームズ・ランカスターが1591年4月に喜望峰周りでアラビア海に3艘の船で出港した。これは、イングランドのインドへの初期の海上航海であった。その3艘の中の一艘であった Edward Boneventure は、イングランドのデヴォン州のトーベイ (Torbay) から、コモリン岬 (Cape Comorin) を回って、マレー半島に航海し、そして、1594年にイングランドに戻った。その後、1596年に3艘の船が東に向かったが、行方不明になった。1598年にも別の商人グループが3千ポンドほどの資本金を調達し、会社を設立した。国王の非公式な許可を得るために航海用の船を購入し、資本金を7千ポンド程にして、再度会社が設立された。1600年12月31日にエリザベス国王は、カンバーランド伯 (George Clifford, 3<sup>rd</sup> Earl of Cumberland) (1558年生-1605年没)、215人の騎士、市参事会員、および市民に勅許 (Royal

後15年の間、喜望峰の東およびマゼラン海峡の西に位置する全ての国々との貿易を独占し、東インドと貿易をするロンドン商人によって設立された会社であった。その株式<sup>25</sup>は、富裕商人や貴族によって保有され、政府は株式を保有せず、間接的にそれを支配した。この会社は、自身の軍隊でその軍事力を遂行し、その地域を支配した。

この会社は、オランダの東インド会社と競争関係にあった。この会社は、最初のジェームズ・ランカスター (James Lancaster) (1618年没) によって指揮された航海<sup>26</sup>では、インドネシアのジャワ島の西端に位置したバンタム (Bantam) に工場<sup>27</sup> (貿易拠点) を設け、20年間、ジャワからの香料輸入が東インド会社の重要な交易になった。1608年に貿易拠点として設立されたスラト (Surat) に、インドに到着する船は入港した。東インド会社は、1610年に、ベンガル湾 (Bay of Bengal) のコロマンデル海岸 (Coromandel Coast) のマスリパタム (Machilipatnam) に南インドでの最初の工場を建設し、その貿易の拠点を築いた。この会社がもたらす高い利益が、ジェームズ1世に他の貿易会社にも勅許を与える<sup>28</sup> ようにさせた。

その会社は、1612年の Battle of Swally でポルトガルに勝利し、インド大陸に領土的足場を獲得するための冒険に乗り出し、国王に外交親書を出すことを求めた。1615年に、ジェームズ1世は、Thomas Roe 卿<sup>29</sup> にムガル帝国の訪問を命じ、東インド会社にスラトに

---

Charter) を与えた。Governor and Company of Merchants of London trading with the East Indies の名の下に勅許が与えられた。

<sup>25</sup> 設立時の東インド会社は、その都度全資産が分割される会社であった。これは、「当座会社」であった。それが利益を配当として分配する株式会社になったのは、清教徒革命後にクロムウェルの共和制の議会において決議によってであった。

<sup>26</sup> この航海で大量 (103ポンド) の胡椒がイングランドの胡椒市場に持ち込まれ、胡椒価格は半値に低下した。東インド会社設立以前には3シリング/ポンドが、1608年には、1シリング半に低下した。胡椒は再輸出されたが、イングランドの胡椒価格は低下した。

<sup>27</sup> この工場は、1683年に閉鎖された。

<sup>28</sup> 1609年に、ジェームズ1世は、勅許を無期限で与えることにした。その際、3年間継続して損失が生じる場合には、勅許の効力が無効になるという条項を付していた。

<sup>29</sup> トマス・ローは、1593年12歳でオックスフォードのマグダラ・コレッジに入学し、1597年に Middle Temple (中央法学院) に入り、エリザベス1世の紳士団の一人になった。1604年7月23日にジェームズ1世によって騎士に任命され、ウェールズ皇子ヘンリーと親しくなり、後にボヘミア王女になるエリザベスとも親しくなった。1610年にヘンリー皇子の命で西インドに使わされた。その間に彼は、ギアナ (Guiana) とアマゾン川を訪れたが、金鉱を発見することはできなかった。1614年に、彼は、Tamworth から下院議員として選出され、1615年から18年に亘って、ムガル大帝のインドのアグラ (Agra) の宮廷に大使として派遣されていた。その主要な目的は、スラトにあるイングランドの東インド会社の工場に対する保護をえることであった。彼は、ムガル宮廷では、皇帝 Jahangir (あるいは Nuruddin Mohammand Salim) (在位 1605年-1627年) の酒飲み仲間であった。1621年には、彼は、グロスター州のキレンシスター (Cirencester) から下院議員に選出された。同年に、彼は、オスマン帝国の大使に任命された。その使命は、イングランド商人の権限を拡張することであった。1624年にアルジェリア協定で数千人のイングランド捕虜を開放した。

貿易の拠点を設ける特権を与える通商条約を締結した。

その後、その帝国からの保護を受けた東インド会社は、商取引を拡大し、ゴア、チタゴン (Chittagon), ならびにボンベイに貿易の基地を設けていたポルトガルをインドから追い出した。1639年にマドラス (Madras), 1668年にボンベイ, 1690年にカルカッタ (Calcutta) に貿易拠点を築いた。1647年までには、その会社は23の拠点をもちた。その会社の取引商品は、綿、シルク、インディゴ染料、硝石 (saltpetre) および紅茶であった。

イングランドの東インド会社とオランダの東インド会社が、この地域でのポルトガルとスペインの影響力の低下と共に、競争状態に入り、イングランドーオランダ戦争に突入した。チャールズ2世は、東インド会社の力を強化するために、土地の自動的獲得の権利、貨幣を発行する権利、要塞や軍隊を支配する権利、民事および刑事裁判権をその会社に与えた。

## 4.2 ジェイムズ1世の勅許会社と植民政策

### 4.2.1 ヴァージニア会社の設立

ヴァージニア会社は、1606年4月10日にジェイムズ1世の勅許によって設立された株式会社であった。その目的は、ジェイムズ1世が王位に就いた頃には、イングランド王室の財政が逼迫<sup>30</sup>し、イングランドの森林<sup>31</sup>や自然資源は枯渇していたので、北アメリカ海岸に居住地を設け、そこの住民(ネイティブ)と交易し、そこから利益を生み出すことであった。ジェイムズ1世によって勅許されたヴァージニア会社は、2つの会社から構成されていた。その一つは、ロンドンのヴァージニア会社 (Virginia Company of London), 他はプリマスのヴァージニア会社 (Virginia Company of Plymouth) であった。2つは、同じ勅許で活動したが、その活動領域は異なっていた。すなわち、プリマスのヴァージニア会社は、北緯38度から北緯45度の間に100マイルの居住地(チェサピーク湾と現在のカナダの国境との間の地)を設けることが認められた。他方、ロンドン会社は、北緯34度と北緯41度の間に居住地(フィア岬とロングアイランド湾の間の地)を設けた<sup>32</sup>。1607年8月にプリマス会社は、メイン州のSagadahocにポップラム植民地<sup>33</sup> (Popham Colony) を築いたが、1年足らずでそれを棄て、

<sup>30</sup> スペインとの戦争のために、その財政は汲々としていた。

<sup>31</sup> ロシア会社がオランダからlumberやpitchなどの財を輸入していた。しかし、ヨーロッパにおけるイングランドの交易の不安定さやその変動が、イングランドをして新世界との交易に乗り出させた。金やその他の財宝をイングランドにもたらすために投資がなされ、中東及び中国にいたる北西航路の開発のための投資がなされた。

<sup>32</sup> また、ロンドン会社は、大西洋岸および内陸カナダをも所有していた。

<sup>33</sup> この植民地は、現在、Kennebecke川の河口のメイン州Phippsburgeの町に設けられた。1607年5月31日におよそ120人の植民者がプリマス港を出発した。この植民地の指導者は、ポップラム (George Popham) (1550年生-1608年没)で、「God of Gift」に乗船した。副官はローリー・ギルバート (Raleigh Gilbert)

活動を停止した。だが、その後、1620年にメイフラワー号で到着した殉教者とともに、この会社は、恒常的な定住地を設けた。それは、現在では、ニューイングランドと呼ばれている。

#### 4.2.2 植民地ジェームズ・タウン

他方、ロンドン会社<sup>34</sup>は、1607年5月に植民地ジェームズ・タウンを建設した。これは、ジェームズ川沿いの40マイルの陸地であった。1606年12月20日に、ロンドン会社に雇われたクリストファー・ニューポート (Christopher Newport)<sup>35</sup> (1561年生-1617年没) は、旗艦のスーザン・コンスタント (Susan Constant)<sup>36</sup> と他の小型船のゴッドスピード (Godspeed)<sup>37</sup> およびディスカバリー (Discovery)<sup>38</sup> の3隻でイングランドを出発した。カナリヤ諸島を通過して、大西洋を横断し、プエル・トリコを経由して、144日間の航海の末に、104人の船員は、その4月26日にチェサピーク湾の入り口に到着し上陸した。これが First Landing と呼ばれた出来事であった。彼らは、そこに十字架を立て、その地をヘンリー岬 (Cape Henry)<sup>39</sup> と名付けた。彼らは定住地の探索を始めた。彼らは、その湾の内側を西方に進み、現在の Hampton Roads の河口辺りを探索し、ジェームズ1世を祝して名付けられたジェームズ川の出口を探索し、Appomattox 川との合流点まで行き、そして、ジェームズ・タウン<sup>40</sup> まで下りた。

---

(不明) で、彼は、「Mary and John」に乗船した。1607年5月31日におよそ120人の植民者がプリマス港を出発し、1607年8月にメーン州 Phippsburge に居住地を設けた。貴金属や香料や毛皮貿易を狙っていたが、しかし、1607年の秋には、半分以上の植民者が戻り、半分の植民者はそこで冬を越したが、翌年の秋には、全ての植民者が本国に戻った。この植民地は、恒常化しなかったが、イングランドの2番目の植民地であった。

<sup>34</sup> ロンドン会社は4人の合名会社であった。4人とは、エドワード・マリア・ウィングフィールド (Edward Maria Wingfield) (1550年生-1631年没)、リチャード・ハクルイット (Richard Hakluyt) (1552あるいは1553年生-1616年没)、トマス・ゲイツ卿 (Sir Thomas Gates) (1585年-1621年に活躍)、ジョージ・ソマース卿 (Sir George Somers) (1554年生-1610年没) であった。

<sup>35</sup> 彼が Susan Constant の船長に雇用されたのは、彼の前歴に因っていた。彼は、時々、カリブ海でスペインの積み荷を急襲する私掠船で働き、資金を提供していたロンドンの商人とその略奪品を分け合っていた。また、彼は、20年以上に亘って私掠船を支配し、1592年には、ポルトガル船 Mardre de Deus を襲撃し、500トンに及ぶ香料、絹、宝石用原石、その他の宝を略奪し、イングランドの港に戻った。

<sup>36</sup> スーザン・コンスタントの船体の重量が120トン、その長さが35mであった。それは、1607年5月にイングランドに戻り、1615年までは商人の船として使用されたが、その後の運命は知られていない。

<sup>37</sup> ゴッドスピードの船長は、バーソロミュー・ゴズノルド (Bartholomew Gosnold) (1572年生-1607年没) であった。この船には、39人の乗客と13人の水夫が乗船した。その重量は40トン、その長さは21mであった。

<sup>38</sup> ディスカバリーの重量は20トン、その長さは12mであった。この船の船長は、ジョン・ラットクリフ (John Radtcliffe) (1609年没) であった。ニューポートがイングランドに戻るとき、この船が植民地の人々のために残された。

<sup>39</sup> これは、ジェームズ1世の長男ウェールズ皇太子のヘンリー・フレデリック (Henry Frederick) (1594年生-1612年没) を祝してつけられた。

<sup>40</sup> 定住地ジェームズ・タウンの特徴を示しておこう。そこは、大西洋から40マイル (64 km) 離れた半島で、

植民地議会の総督 (President) であったエドワード・マリア・ウィングフィールド (Edward Maria Wingfield) (1550年生-1631年没) は、1607年5月14日に、ジェイムズ・タウンを要塞定住地に決め、要塞定住地をその6月に完成させた。そこに定住始めたのは、その年の夏であったので、その年の収穫を期待することはできなかった。植民者の多くは、貴族とその従僕者で、農耕には慣れていなく、植民地を切り開くきつい仕事の労働に適していなかった。ニューポートは、3ヵ月間港に停泊し、1607年7月に硫化鉱 (Fool's Gold) を積んでイングランドに戻った。その後、賃貸されていたスーザン・コンスタント (Susan Constant) は、ヴァージニアには戻ることはなかった。その定住地の土質は農耕に適していなく、また、植民者も農耕者には適していなかったので、1607年9月までには、植民者の中の60人程は死に絶えたか、あるいは、インディアンへの脱走した。1607年9月10日に、エドワード・マリア・ウィングフィールドは、総督の地位を2代ジョン・ラットクリフ (John Ratcliff) に譲った。

#### 4.2.3 窮乏化するジェイムズ・タウン

ニューポートは、1608年の間に2度、物資の補給のためにイングランド本土を往復しなければならなかった。その植民地では、食物を生育させ、アメリカの原住民と交易することが最初の計画であったが、しかし、実際には、イングランド本土からの物資の補給に依存した。1608年1月8日に、ニューポートによって指揮された「John and Francis」と「Phoenix」の2艘で最初の補給物資が運ばれてきた。それと同時に120名の男子を連れてきた。これによって植民者数は158人であったと記録されている。1607年-1608年の冬の間に、不注意な火災のために植民者は焼失した建物で越冬しなければならなかった。そして、不潔な飲料水と栄養不足のために半数以上の植民者が死に絶えた。このときの総督は、3代のマッシュュー・スクリュエーヴィナー (Matthew Scrivener)<sup>41</sup> (1580年生-1609年没) であった。

ニューポートは物資の補給のために直ぐにイングランドに戻り、そして、1608年9月にニューポートに指揮された「Mary Margaret」によって、第2回目の物資補給がジェイムズ・タウンにおこなわれた。2回目にも70人の新しい植民者を連れてきた。この中には、2人の女性や、ポーランド人とドイツ人の職人もいた。しかし、ニューポートは、1609年10月に次の物資を運ぶためにイングランドに戻ったが、このとき、その夏にチェサピーク湾を探検し、ヴァー

---

北にヨーク川、南にジェイムズ川、東にチェサピーク湾に囲まれていた。そこは、水深も深く、航海ならびに防衛上で優れていた。そこにはインディアンが居住していなかったが、しかし、その土地は、沼地で、孤立していて、限定された土地しか耕地に提供できなく、蚊と塩分のために飲料水に適していなかった。

<sup>41</sup> 彼は、最初の104人の移民者の一人であった。彼は、サフォーク州イプスウィッチの出身で、法廷弁護人であった。彼は、若かったために統治能力を発揮する前に、不慮の海難事故のために死亡した。彼の後任者は、彼の支持者であり、友人であったジョン・スミスであった。

ジニアの探検地図を作製し, 火薬暴発事故で負傷した, 4代総督ジョン・スミス (John Smith)<sup>42</sup> (1580年生-1631年没) を伴ってイングランドに戻った。その後, ジョン・スミスは, 再び, ヴァージニアには戻ることはなかった。ジョン・スミスが去ったヴァージニアでは, ヴァージニア議員のジョン・ラットクリフ (John Ratcliff) が1609年にインディアンの Powhatans 族に殺害された。

総督ジョン・スミスの後任には, ジョージ・パーシー (George Percy) (1580年生-1632年没) が第5代として就任した。1609年のヴァージニアのプリマス会社の廃止に伴って, ヴァージニア会社の勅許は, 北緯34度線の北と39度線の南の間の領域に調整され, また, 形式的には, ヴァージニア植民地は, 太平洋 (現在のカリフォルニア)<sup>43</sup> まで拡大された。第3回目の物資の補給は, ドーゼット生まれでイングランド議会の議員であったジョージ・ソマース卿 (Sir George Somers) (1554年生-1610年没) をその物資補給の長官として, 新しく建造された「Sea Venture」<sup>44</sup> を旗船とした9隻 (その内の2隻は上陸用小型船) のよってなされた。1609年6月2日に, その船団は, イングランドのプリマス港を出港した。その乗船者は, 500から600人程であった。その船団は, ヴァージニアに向かっていた途上で, 1609年7月25日に暴風 (多分, ハリケーン) に遭遇し, その Sea Venture と他の一船がはぐれた。彼は,

<sup>42</sup> ジョン・スミスは, 1608年9月から1609年8月までの1年間, ヴァージニアの植民地の指導者 (総督) であった。彼は, 1580年1月にリンカン州のウィロウビーで洗礼を受け, 1592-1595年の間, エドワード6世のグラマー・スクールで教育された。父の死後, 16歳か17歳で家を出た。彼は, フランスのアンリ4世の軍で傭兵としてスペインに対して戦い, オランダ独立戦争のために戦った。彼は, 地中海で交易と私掠に従事し, オスマン・トルコと戦った。彼は, Transylvanian 王子によって騎士にされたが, 1602年にタタル人との小競り合いで負傷し, 捕らえられ, 奴隷として売られた。その後, 彼は, コンスタンティンノーブルのギリシャ人の女主人に贈られ, クリミア半島に連れて行かれたが, オスマン・トルコの領地からロシアに逃亡し, ポーランド・リトアニア国に行き, 1604年にイングランドに戻った。

1606年には, 冒険家で軍人のジョン・スミスは, 利益目的のために設立されたヴァージニア植民地を建設するロンドン会社に属していた。そして, 1606年12月20日に, クリストファー・ニューポートを船長にしたスーザン・コンスタント (Susan Constant) などの3隻でヴァージニアに出港した。彼は, ジェームズ・タウンの植民地の探検家および総督として活躍した。彼のモットーは, “he who works not, eats not” であった。この言葉は, ジェームズ・タウンが飢えに瀕していたことを意味していると解釈される言葉であろう。彼は, 2年半の間, 植民地ジェームズ・タウンのために全力を尽くしたが, 1609年10月に治療のためにイングランドに戻り, 再び, ヴァージニアには戻らなかった。

<sup>43</sup> ヴァージニアとカリフォルニアの間にあるケンタッキー, ミズリー, コロラド, ユタなども含まれた。

<sup>44</sup> この船の重量は300トン, 建造費用は1,500ポンドであった。それは移民目的のために建造された。この船の船長は, クリストファー・ニューポートであった。この船には, 後に, ジェームズ・タウンの総督 (長官) の職に就いたトマス・ゲイツ卿 (Sir Thomas Gates) (1585-1621年に活躍) やジョージ・イヤールディレー卿 (Sir George Yeardley) (1587年生-1627年没), ジェームズ・タウンに煙草をもたらすジョン・ロルフ (John Rolfe) (1585年生-1622年没), 「Sea Venture」の難破やジェームズ・タウンの悲惨さを著した作家でかつヴァージニア会社の株主であったウィリアム・ストラシー (William Strachey) (1572年生-1621年没), およびシルベスター・ジョーダン (Sylvester Jordain) (不明) も乗船していた。

3日間、嵐と戦ったが、新しく建造された Venture には欠陥があり、水防止栓がもぎとられ、船内に浸水してきた。その浸水を避けるためにバーミューダ諸島の珊瑚礁上を走行した。150人の乗船者（植民者）は、その海岸線の Discovery Bay に上陸し、そこに10ヵ月間残留し、その間に、教会と住居を建て、2隻の船<sup>45</sup>を建造した。イングランドを出港してから1年後の1610年5月23日に、彼らは、ヴァージニア植民地に到着した。そこに到着すると、彼らは、その植民者達が病気と飢えによって破壊されていたことを知った。さらに、彼らは、物資や食物をヴァージニア植民地にもたらしことはできなかった。このジェームズ・タウンでは、1609年の秋から1610年5月<sup>46</sup>の間に、植民者の80パーセント以上は死亡したために、ヴァージニアのプリマス会社のポッパム植民地と同じ運命にあると判断され、ニューポートおよび生き残った植民者は、ジェームズ・タウンを棄て、本国イングランドに戻ることを決意した。1610年5月に、総督パーシーの後任には、トマス・ゲイツ卿（Sir Thomas Gates）（1585年-1621年の間活躍）が第6代の総督になった。

#### 4.2.4 ジェームズ・タウンの放棄とその救済

トマス・ゲイツ卿の指揮下の植民者は、ジェームズ・タウンを棄て、1610年6月10日に、Mulberry 島に近づくと、イングランドからの補給船（「Deliverance」）に出会った。彼らにそこを棄てることを諦めさせ、残留することを説得し、その船を指揮していた人物は、3代デラウェア男爵のトマス・ウェスト（Thomas West, 3<sup>rd</sup> Baron De La Warr）<sup>47</sup>（1577年生-1618年没）であった。その船長は、サミュエル・アーガール卿（Sir Samuel Argall）（1572あるいは1580年生-1626年没）で、アイルランドでエセック伯ロバート・デヴェロー（Robert Devereux, 2<sup>nd</sup> Earl of Essex）（1556年生-1601年没）の下で軍人であった。3代デラウェアは、7代のジェームズ・タウン総督として、150人の植民者の部隊を指揮し、彼のアイルランドでの戦争経験を活かし、アイルランド戦術<sup>48</sup>でインディアンと戦った軍人であった。彼は、ジョージ・パーシー（George Percy）（1580年生-1632年没）を議員に任命し、その要塞の長（8代ジェームズ・タウン総督）に再任命し、彼に Paspahogh および Chickahomity のインディアンおよびその居住地を襲撃させ、焼き払らわさせ、穀物をなぎ倒し、男、女、

<sup>45</sup> それは、70 から 80 トンの「Deliverance」と30トンの「Patience」であった。

<sup>46</sup> この期間は、Starving Time と呼ばれている。

<sup>47</sup> 彼は、オックスフォードの Queen's College で教育を受けた。彼は、エセック伯ロバート・デヴェロー（Robert Devereux, 2<sup>nd</sup> Earl of Essex）の下で軍人であった。1601年にエセック伯の乱で逮捕された。1602年に議員になった。

<sup>48</sup> アイルランド戦術とは、軍隊が村を襲撃し、家々を燃やし、小麦にたいまつで火をつけ、食糧を盗む戦術である。この戦術はインディアンによっても用いられた戦術であった。

あるいは小人の見境なく殺戮させた。同時に、彼らにジェイムズ・タウンをインディアンの攻撃から防御させた。

ロンドンのヴァージニア会社は、副官(陸軍元帥)にトマス・デール卿(Sir Thomas Dale)(1619年没)を選出し、病気の7代総督トマス・ウェストの下で働くためにヴァージニアに送り出した。1611年5月11日に、彼は、雄牛および物資と共にジェイムズ・タウンに着くと、8代総督パーシーの下で働いた。トマス・ウェストは、すでに、療養のために1611年にイングランドに戻っていた。彼は、植民地の名目上のイングランドの長官であったので、植民者からアーガール総督が専制暴君として訴えられると、1618年にその訴えを調査するためにジェイムズ・タウンに船で向かったが、その途中で死亡した。

第9代総督にはトマス・デール卿が就いた。彼は、ジェイムズ・タウンより優れた定住地を求めて、ジェイムズ川を上り、チェスター郡の領域に至り、ジェイムズ川とアポマックス川の合流する領域の可能性を確認し、そして1611年に、新しい植民地の Henricu<sup>49</sup>(現在のチェスター郡にある)がトマス・デールによって創設された。この名は、ジェイムズ・タウンに取って代わる定住地として建設され、国王ジェイムズ1世の長男ウェールズ皇太子のヘンリー・フレデリック(Henry Frederick)に因んで付けられた。この Henricu の近くに、1612年から1613年に、北アメリカのイングランド植民地で最初の病院が建設された。これは、Mt. Maladyとして知られている。また、1612年に、勅許によって、ヴァージニア植民地の一部にバーミューダ諸島が含まれ、Bermuda Hundred や Bermuda Cittie の港町が建設された。

#### 4.2.5 植民地の払い下げとその成長

##### (1) 植民地の払い下げと私有地の拡大

1613年に、総督のデールは、株主の同意を得ることなく、共同農業を止め、それを入植者に配分した。古い入植者には3エーカー(12km<sup>2</sup>)の区画地、そして新しい入植者にはより小さな区画地を配分した。これによって相当の経済成長が達成された。入植者達は、耕地面積を近隣のインディアンの土地にも拡大させた。食物生産が著しく成長したばかりではなく、その翌年にその区画に煙草生産がジョン・ロルフ(John Rolfe)(1585年生-1622年没)によって持ち込まれた。1614年に、総督のデールは、植民者のために製塩業、および、漁業を始めるために、チェサピーク湾の辺りに作業員を送った。

次の総督は、ジョージ・イヤールディレー卿(Sir George Yeardley)<sup>50</sup>(1587年生-1627年

---

<sup>49</sup> ここは、現在のヴァージニア州のリッチモンドの南西数マイルに位置している。

<sup>50</sup> 彼は、1588年にサリー州の教区で洗礼を受けた。彼は、ネーデルランドでスペインと戦うためにイングランド歩兵会社に加わった。彼は、1609年6月に第3回目の物資補給のためにジェイムズ・タウンに向かった9隻の船団でジェイムズ・タウンに向かった。彼は、Sea Ventureに乗船したが、出航後8週後に暴風

没)であった。彼は、3度総督の役職の地位に就いた。最初は、1616年から1617年、次は、1619年から1621年、3度目は1626年から1627年であった。彼の大きな仕事は、1619年にイングランドのアメリカ植民地での最初の議会 (House of Burgesses) を開催したことである。この議会は、それぞれの植民地からの代表によって構成された。

1618年には、Henricuo 大学のために勅許が与えられた。その翌年にその土地が用意された。

## (2) ジェイムズ・タウン植民地での煙草産業

ジェイムズ・タウンは放棄されそうになったが、デラウェアの到着によってそれが回避された。ジョン・ロルフ (John Rolfe)<sup>51</sup> は、彼の妻と子供はバーミューダ島で死亡したが、1610年5月にジェイムズ・タウンに到着し、煙草の品質改良に努力した。ヴァージニアのロンドン会社の煙草は、イングランドの市場では人気がなかった。彼は、トリニダードからの甘い品種を取り入れて品種改良に努力した。彼は、*Nicotiana tabacu* という煙草を改良し、育成したことで知られている。このときでも、スペインが煙草貿易を独占していた。新大陸でのスペインの植民地は、イングランドの植民地より南にあり、温かい気候で煙草生産に適していた。ジェイムズ・タウンでの煙草生産を増加させ、イングランドとスペインの貿易の不均衡を解消することが課題になっていた。彼は、その改良された煙草を *Orinoco*<sup>52</sup> と呼んだ。この煙草の輸出が、ロンドン会社のヴァージニア植民地を利益のある冒険会社に向かわせた。その輸出の増加は、ジェイムズ川沿いに煙草の植民地が増加し、輸出船は停泊のためにその岸壁を使用した。彼は、1612年に Varina 農園を設立し、その植民地はジェイムズ川に沿って、ジェイムズ・タウンからその上流に48 km程上り、そして、Henricus からジェイムズ川に横切って位置していた。

ロルフは、1614年4月5日に、土着のアメリカのポウハタン (Powhatan) 族のリーダー (Wahunsunacawh) の娘ポカホントス (Pocahontas)<sup>53</sup> (1595年生?-1617年没)<sup>54</sup> と結婚し

---

に遭い、難破したが、現在のバーミューダ群島にたどり着いて上陸した。そこで10ヵ月ほどとどまり、小さな2隻の船を建造し、それから1610年5月23日にジェイムズ・タウンに到着した。彼は、初め、トマス・ゲイツのボディガードとして仕えた。ジェイムズ・タウンを棄てて、イングランドに引き返そうとしたとき、デラウェア男爵を長とするイングランドからの物資補給船に助けられ、ジェイムズ・タウンに戻った。この男爵の命令の下で、金や銀鉱を探すために山々を踏み入った。

彼は、1619年に1,000エーカーの土地を Mulberry 島に与えられた。また、ジェイムズ川の南岸に私有の植民地を所有した。彼は、そこを Flowerdew Hundred と名付けた。

<sup>51</sup> ロルフは、ノーホーク州の Heacham で生まれた。1585年に授洗した。

<sup>52</sup> この名前は、オリノコ川 (Orinoco River) から取ったもので、煙草を人口に膾炙させたウォルター・ローリーに因んでこの名を付けたと思われる。ローリーは、1580年代にエルドラド伝説を求めて、ギアナ (Guiana) のオリノコ川を冒険した。

<sup>53</sup> 彼女は、1613年のイングランド-インディアン戦争の最初の年に、アーガル卿に騙されて捕らえられた。

た。この結婚は、アメリカの歴史における、最初の人種間の混血であった。このとき、彼の長年の友人であったアレクサンダー・ウィタカー (Alexandar Whitaker)<sup>55</sup> (1585 年生-1616 年没) が結婚式の司祭を務めた。ウィタカーは、ポカホンタスが捕虜とされていたときに、Henricus において、彼女をキリスト教に改宗させ、その洗礼名をリベカと名付けた。

### 4.3 植民地とユートピア

フランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』の書き出しは、「ペルーを発った私たちは、南海<sup>56</sup> 経由で、中国と日本をめざして出帆した。……。なにしろ南海のこのあたりは、まったく未知の領域なので、これまで知られていない島や大陸があるかもしれない。……。さらに1時間半の帆走の後、美しい街の港になっている停泊地に入った。……」<sup>57</sup> となっている。ここが科学技術の最高に進歩したベンサレム島 (ベーコンは、その島をベンサレムの島と呼んでいる) であった。ベーコンの寓話は、彼のギリシャ神話から発展させたユートピア寓話であり、また、それは、トマス・モアの伝統的手法を踏まえて描かれ、航海中に遭難し、偶然に行き着いた未知の孤島であった。そこは、これまでに見たことのない、自然科学研究の成果を実用化できる工場や設備を備えた理想のコモン・ウェルスであり、それを実現させようとするベーコンの寓話による理想郷であったと理解される。その島は、周囲 5,600 マイルで、肥沃な土地であり、十分に自給自足が可能であり、平和と繁栄とを享受した島国であった。その政治制度は王制であり、厳格な家族制度 (家父長制) に支えられた社会構造をもち、自然科学研究を成功させるための工場や設備<sup>58</sup> を備えた「サロモンの家 (ソラモナの家)」の

---

彼は、彼女の父によって捕らえられているイングランド人の開放と盗まれた武器や道具の返還を要求した。Powhatan は捕虜を戻したが、戻された武器や道具の数にイングランドの植民者は満足しなかった。そのためポカホンタスの拘留が長引き、その間、イングランドの植民者は、彼女を捕虜とした。

<sup>54</sup> 彼女の誕生年は、ジョン・スミスの A true Relation of Virginia (1608) からの推測である。

<sup>55</sup> 彼は、ケンブリッジで生まれ、トリニティ・コレッジで教育を受け、イングランド北部で牧師になった。そして、1611 年にヴァージニアに移住したキリスト教の宗教家であったが、ジェームズ・タウン定住地の近くに 2 棟の教会を建てた。彼は、植民者にもネイティブにも宗教的指導者であった。彼は、今日では、ヴァージニアの使徒として知られている。

<sup>56</sup> 南海は、太平洋の旧称である。

<sup>57</sup> 『ニュー・アトランティス』(ベーコン著: 川西 進 訳) (岩波文庫) 7 頁から 8 頁からの引用である。

<sup>58</sup> 前掲書の 52 頁から 56 頁には以下のような記述がある。島には、諸物体の凝固硬貨、冷却と保存のために利用したり、あるいは、貯蔵庫として利用したり、新しい人口金属の生産に利用される洞窟があり、また、日光乾燥、冷却、貯蔵のため、風、雨、また風、雨、雪、雹、流星などの大気現象の観察に利用される高い塔があり、また、島には、魚類、鳥類を放している淡水あるいは海水の大きな湖があり、さらに、自然の湧き水や鉱泉を真似た人工の井戸と泉があり、果樹園や菜園があり、そこではあらゆる種類の接ぎ芽接ぎなどの実験が行われ、木や花の促成栽培が人工的に試みられている。島には、実験や解剖のために、あらゆる種類の動物や鳥の園や檻がある。例えば、多産にする実験や子を産まないようにする実験、薬物や毒物の試験的投与、異常成長や矮小させる実験が行われている。

研究体制が敷かれている<sup>59</sup>。この研究所には、あらゆる動植物が集められ、そこでは各種の解剖と実験<sup>60</sup>が行われている。

ベーコンの『ニュー・アトランティス』に描かれているベンサレムの島は、コロンブス達によって発見された新大陸と旧大陸の狭間に位置しているが、何処にあるかは分からない(未知である)。彼は、この島を、新大陸同様に、ヨーロッパ人が探し出す事を期待していたのではないであろうか<sup>61</sup>。多分、彼の法律、政治、経済体制は、プラトンの『国家』、『法律』、あるいは『Timaeus (ティマイオス)』に倣った内容になっていたと考えられるが、残念ながら、『ニュー・アトランティス』は彼の死 (1626年) によって未完のまま終わっている。ベーコンもプラトンの『国家』同様に哲人王を理想にし、『法律』と同様に君主に国家の平和と繁栄を求める君主鏡の思想を持っていたと考えられる。

その著作『Timaeus (ティマイオス)』および『Critias (クリティアス)』において、プラトンは、彼の宇宙創成を語り、宇宙に見出される自然の法を語っているが、それと共に、アトランティス王国についても語っている。『ニュー・アトランティス』において、ベーコンは、ヨーロッパ人が‘アメリカ’と呼んでいる大陸を大アトランティス王国とし、この王国を新大陸<sup>62</sup>のペルー(ベーコンは、この地をコヤと読んでいる)やメキシコ(ベーコンは、この地をティランベルと読んでいる)と同様に、軍備、船団、豊かな資産を誇る強国であった、と記述している。ベーコンは、大アトランティス国やその他の多くの国々(ペルシャ、カルデア、ア

<sup>59</sup> この家の名は、プロテスタントであったベーコンが聖書の「知恵の王」ソロモンにならって命名された。ベーコンは、南海の地のどこかにあるかも知れないベンサレムの島を理想郷として描き、厳格な家族制度に支えられた社会構造の下で、国民(住民)の健康を増進する設備(ベーコンによって‘楽園の泉’と言っている水を作り出す井戸や泉、病気の治療と健康に維持に効果のある空気を調整する‘健康室’、筋肉、内臓、人体の精髓の体液を強壮にする浴場など)や、住民の食生活を豊かにする設備(醸造所、製パン所や工芸所)、遺伝あるいは発生学、光学や天文学、あるいは音響学を発展させ、同時に、香料研究所、動力研究所、数学研究所、錯覚研究所などの研究施設や設備が完備された社会をニュー・アトランティスに描き、その島を探求することを後世の人々に託したと読むことも出来る。

<sup>60</sup> 例えば、ベーコンは、「内科的、外科的に、毒物や薬物を試験的に投与し、異常に大きく、高く成長させたり、反対に矮小にしたり、成長を留めたり、標準以上に多産にしたり、反対に不毛にし、子を産まぬようにする実験を行う。また、色、形、動作などを変える手術もする。」、さらに、「われわれは異種間の混交、交配の方法を知っており、それによってすでに多くの新種を得ている。」(前掲書 55頁から 56頁)とその研究所での動植物による実験を紹介している。

<sup>61</sup> 1621年5月に政界を追われたベーコンは、自然科学研究所を実現する権限も資金も完全に奪われた。彼は、書籍にその研究所の完成概略図を記録することによって、将来の世代に“学問の進歩”を託したのであろうと想像される。

<sup>62</sup> 16世紀には、新大陸は中世の眼鏡を通して見られ、そこでは神話的生物や怪物(巨人、矮小人、龍、鷲鳥有翼の獅子(グリフィン)、白髪の子供、髭のある女、尻尾の生えた人間、頭のない人間など)に出会えると信じられていた。ベーコンは、新大陸を支配すべき国とみなし、その彼方に理想郷(ニュー・アトランティス)があると唱えたのであろうか。

ラビア) と、その島が交易を行っていたことや、また、大アトランティス国は、大洪水、大氾濫のために、完全に破壊され、消滅したこと、さらに、そのために、アメリカの人口<sup>63</sup>は希薄であり、アメリカ人は粗暴で無知である、と記述している。ベーコンは、新大陸を植民地にすることについてどのように考えていたのであろうか。

### むすびにかえて

本稿では、イングランドとスコットランドの同君連合後のイングランドにおいてのジェームズ1世の内政および外交政策の遂行において、イングランド議会との対立・闘争を通じて、如何にして彼自身のその政策を実行したかを調べた。特に、ジェームズ王家の財政収入の調達と、スペイン戦争の遂行のための資金調達の関係でジェームズ王と議会との対立を概観した。また、彼の宗教政策では、エリザベス1世の宗教政策を継承したことを説明した。

さらに、彼の枯渇する国庫を救済するための勅許会社の拡張と植民政策の推進を概観した。後者の植民政策の成功例としてのジェームズ・タウンを取り上げ、その植民地が食糧難などから餓死者が多数発生し、その地を棄て、イングランド本国に退散する危機に見舞われた。すんでの所で本国からに支援によって植民生活を続けるジェームズ・タウンであったが、先住民との戦いのみならず、大地との闘いに明け暮れた。たばこ産業の展開ならびに植民地の私有地化によって、ジェームズ・タウンが活気を取り戻すことになったことを示した。

イングランド王国は、スペイン王国やフランス王国と競いながら新大陸に乗り出したが、その地を単に植民地と位置づけようとしていたのであろうか、それともあるいはベーコンが「サロモンの家 (ソラモナの家)」の財宝としてヨーロッパ人に紹介している農学、生物学、医学 (含む薬品開発)、さらに天文学、物理学 (含む光学研究や音響研究)、数学、化学 (含む香料研究) などの研究所の発祥地にしようと構想していたのであろうか。その未知の土地に新たな科学で豊穡な世界の可能性を夢見ていたのであろうか。

### 参考文献

- 浅田 実 著『東インド会社』講談社現代新書 2012年7月 (1989年 第1印刷)  
マックス・ウェーバー 著 (武藤一雄・菌田 宗人・菌田 坦 共訳)『宗教社会学』創文社 1976年8月  
マックス・ウェーバー 著 (大塚久雄 訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月

---

<sup>63</sup> ベーコンは、『ニュー・アトランティス』において、大洪水の後に山間部に生き残った人々が徐々に人口を増やし、全土に広がったが、文字も、技芸も、礼節も、後世に伝えることが無く、また、山間部では虎や熊などの毛皮を纏っていたが、谷間に降りたとき、耐え難い寒さになると、彼らは薄着をすることを知らないために、裸体で生活する習慣を身に付け、今日に至っている、と述べている。

- ラス・カサス著 (林屋永吉 訳) 『コロンブス航海誌』 岩波文庫 1985年4月  
ラス・カサス著 (長南 実 訳) 『裁かれるコロンブス』 岩波書店 1992年5月  
川北 稔著 『イギリス近代史講義』 講談社現代新書 2011年5月  
リンダー・コリー 著 (川北 稔 監訳) 『イギリス国民の誕生』 名古屋大学出版会 2000年9月  
フェリペ・フェルナンデスニアルメスト 著 (関口 篤 訳) 『1492 コロンブス —— 逆転の世界史 ——』 青  
土社 2010年11月  
スマウト, T. C. (木村正俊 監訳) 『スコットランド国民の歴史』 原書房 2010年11月  
ハンケ, L (佐々木昭夫訳) 『アリストテレスとアメリカン・インディアン』 岩波新書 1974年3月  
甚野尚志著 『中世ヨーロッパの社会観』 講談社学術文庫 2007年6月  
フランシス・ベーコン 著 (成田成寿 訳) 『学問の発達』 (世界の名著 20) 中央公論 1973年11月  
フランシス・ベーコン 著 (川西 進 訳) 『ニュー・アトランティス』 岩波文庫 2007年4月  
プラトン 著 (藤沢令夫 訳) 『国家 (上), (下)』 岩波文庫 2009年9月  
プラトン 著 (森進一・池田美穂・加来彰俊 共訳) 『法律 (上), (下)』 岩波文庫 1993年2月  
Plato 著 (Desmond Lee 訳), *Timaeus and Critias*, Penguin Classics 1976年  
ベドロ・マルテル 著 (清水憲男 訳) 『新世界とウマニスタ』 岩波書店 1993年3月  
A. L. モートン 著 (鈴木亮・荒川邦彦・浜林政夫 訳) 『イングランド人民の歴史』 未来社 1976年  
ジョン・ロック 著 (加藤 節 訳) 『統治二論』 岩波文庫 2010年12月  
David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年

(くぼた よしひろ マクロ経済学および金融論専攻)